

# みんなの童話

## 台風と雪駄



今から五十年ほど前、かよの村は、おそろしい台風におそわれた。そして、そのあらしの夜、不思議なことがおこった。

そのころ、村には駄菓子屋が一軒あった。店は、戦争でたんなさんを亡くしたおばさんが、ひとりだけでやっていて、かよは学校から帰ると、十円玉をにぎりしめ、毎日のように、変わり玉や、くじのついた菓子袋を買いに行っていた。

おばさんは、とても親切で、風船やあめ玉を、よくおまけにくれるので、店はいつも、こどもたちであふれていた。

おばさんには、年老いた母親と足の悪い妹がいた。

二人は、村はずれの古い家に暮

らしていて、おばさんはよく二人のめんどうを見に行っていた。あの日は土曜日で、下校の時には、すでにかさがさせないくらいの風がふいていた。

仕事から帰ったかよの父が、雨戸にクギを打ちつけている間にも、雨が雨戸をたたきつけるようにふってきた。

台風のおそろしさを、まだ知らなかったかよは、弟と布団の上になごころんで、少しわくわくしていた。

まもなく停電になった。真っ暗な部屋の中で、ろうそくのあかりがゆれていた。

ヒュー、「オオー」

すさまじい風が音をたてて、家の戸をつき破らんとしていた。

かよの父と母は、たたみを上げ、しなる戸を必死に押さえた。

戸が破られると、屋根が飛んでしまっからた。

「おかあちゃん、おそがいよー」

弟は泣き出し、かよはこわくて、ふるえていた。

その時、ドン、ドン、ドンと、うら戸をたたく音がした。

びっくりして、かよの母が戸をあけると、あの駄菓子屋のおばさんが、ずぶぬれで立っていた。

はだして、足をけがして血が出ている。顔は真っ白だ。

「かあちゃんの家がつぶれた！助けとくりゃー！」

でも、もうれつな勢いであれくる風と雨の中、助けに行くなど、とても無理なことだった。

「今行っても、あかん！ 風に飛ばされてしまっ！」

かよの母が何度言っても、おばさんは聞こうとしない。

「あんたが、どうしても行くなり、これをはいて行きん！」

かよの母は、せめてもと、近くにあった雪駄を渡した。

雪駄は竹の皮のぞつりのことだ。おばさんは、頭を下げ、あらしの中へ走り去った。

そのあとも、台風は一晚中吹き荒れ、かよの父と母は、おばさんのことを気にしながらも、自分の家を守ることで精一杯だった。

夜が明け、村は大変なことになっていった。

駄菓子屋のおばさんの家は、風でたおされ、おばさんは家の下敷きになって、亡くなっていた。

それに、おばさんの母親の家も風でつぶされ、母親と妹も亡くなった。

台風で家が全部こわれたのは、村でこの二軒だけだった。

そして、先に駄菓子屋がこわれ、おばさんの母親の家はそのあとだったこともわかった。

二軒はかなりはなれているのに、その間の田んぼは、稲がなぎたおされ、まるで竜巻が通りぬけたかのように、一本の道ができていた。

でも…

駄菓子屋が先にこわれたのなら、あの時、かよの家に来たおばさんは、すでに死んでいたことになる。

それに、人が立って歩けないほどのあらしの中、近くでもないかよの家に、助けを求めて走ってくるのだが、どうして出来たのだろうか…。

しばらくして、雪駄が見つかった。雪駄は、おばさんの母親の家の近くのあぜ道に、きちんとそろえて置いてあった。

不思議なことに、どろの二つもついていなかった。

「きちんとした人だったで、きれいに洗って返してくれただね…」

かよの母は雪駄をだきしめた。

それから数年後、村に道が出来ることになり、かよの家は立ちのくことになった。

新しい道は、駄菓子屋があった所から、かよの家を通り、その先は亡くなったおばさんの母親の家へと続いていた。

それは、あの台風の夜、おばさんが、母親と妹を助けようと、はだして必死に走って行った道だった。

しろやま会員 いとうけい